

# はにとらマリッジ

*Misa & Makoto*

---

桔梗 楓

*Kaede Kikyo*

termity



エタニティ文庫

## 目次

はにどろマリッジ

5

書き下ろし番外編

御曹司サマと庶民デート

351

は  
に  
と  
ら  
ま  
り  
っ  
じ

## 第一章

古い油の匂いが染みつく郊外の小さな町工場、飛躍製作所。その一員である私——伍嶋美沙は、今日も地道に金具を磨く。

慎重に顕微鏡で見ながら、金具を砥石の上ですべらせた。

「よし、できた」

ふうと一息ついて、顕微鏡のライトを消す。

磨き上げた金具に指紋がつかないように気をつけながら、手に取って見る。仕上がりは完璧だ。

私は四年前に高校を卒業した後、両親が経営しているこの小さな町工場で働きはじめた。それからは、毎日作業服を着て、機械を動かし、工場で作っている金具を磨く日々だ。

もつと華やかな職場で働けばいいのに——そんな風に言う友達もいる。

でも、私はこの仕事がとても楽しくて、充実した毎日を送っていた。それに、小さいけれど夢を持っている。いつか金型の設計をしてみたい、というのが私の密かな夢だ。ちなみに金型とは、製品を作るために使われる金属の型のこと、様々な物の製造に欠かせない。

もつとも、私が働きはじめてから、うちの工場に金型の設計の依頼が来たことはない。依頼されるのは、指示された設計図通りの金具を作る仕事ばかりである。

この町工場は、大企業である桂馬重工のいわゆる下請け企業。起業当初はさまざまなお社と取り引きがあったそうだが、今や桂馬重工からの注文がほとんどとなっている。

そのため、桂馬重工とうちの工場は、親会社と子会社のような関係だ。桂馬重工から注文を受けた金具のサンプルや金型、車両部品などの作成が、うちの工場の主な仕事である。

だけど、これから先、うちの工場の技術力を買って、設計から任せてくれる取り引き先が現れないとは限らない。夢が叶う可能性はある。

だから今は、地道に発注品を作るのみだ。仕事を完璧にやり遂げることが、会社のためにも夢のためにもなると信じ、私は日々励んでいる。

自分の仕事ぶりに満足しつつ金具をケースに仕舞い、大きく伸びをして椅子から立ち上がった。周囲を見ると、誰もいない。

「あれ……？」

私は首を傾げて時計を見た。なんと、正午を過ぎていた。うちの会社は正午から一時間が昼休みだ。

しまった。私はまた熱中していたらしい。

昼休みの開始にはチャイムが流れるのに、それも聞こえないくらい仕事に集中することが、たまにある。そんな私を社員のみんなはよく知っているので、放置されることもしばしばあるのだ。

他の社員たちはみんな昼食を食べにいったのだろう。私もお昼ご飯を食べようと、足早に工場を後にした。

外に出ると、秋めいた爽やかな風がそよりと頬を撫でる。夏よりもいくぶんか遠く感じる青空を眺めながら家へ向かった。我が家は工場の敷地内にあり、徒歩二分で到着するのだ。

ほどなく家の前に着いて、私は玄関ドアの取っ手を掴む。その瞬間、誰かがドアを内側から開けた。ドアの向こうにいたのは、町工場の社長でもある私の父だ。

「ああ、美沙。戻ってきたのか。今、呼びにいこうと思っていたんだ」

「あ、そうなの？」

そこで、玄関に見慣れない靴が並んでいることに気づいた。

男性用の革靴が二足。お客さんが来ているのだろうか。

「実は、桂馬重工の方がいらしているんだ。折り入って話があるそうだな。俺たちも今から聞くところなんだが、どうやら美沙に用があるらしい」

「……私に？」

頭の中が疑問符でいっぱいになる。私はこの工場において、単なる社員に過ぎない。

そんな私に話して、なんだろう。もしかして、気づかぬうちに何かやらかしてしまったのだろうか。

そう思い、体が強張る。そういえば、先週、私が作成した部品サンプルを納品したのだった。それに不備があったのかもしれない。そうだとしたら大事だ。

私が原因で桂馬重工からの発注が減ったら、工場の存続に関わる。うちは桂馬重工からの発注で成り立っているのだ。絶対に失礼のないようにしなければいけない。

ゆっくりと靴を脱ぎ、父の後に続いて廊下を歩く。

クレームだったら平謝りするしかない。とにかく被害は最小限に止めなさい。

私が緊張しながらリビングに入ると、ダイニングチェアに母が座っており、その向かいにふたりの男性が座っていた。

「美沙」

母が声をかけてくると同時に、男性たちがこちらを見る。私は彼らに向けて頭を下げた。

「いらっしやいませ。いつも、お世話になってます」

「あなたが伍嶋美沙さんですね。はじめまして」

男性の一人が軽く頭を下げる。父に促され、私は母の隣に座った。父も母の逆隣に座る。すると男性たちは名刺を取り出して自己紹介をはじめた。

「私は、桂馬重工総務部秘書課、社長付き第一秘書、鷹野と申します」

「同じく、第二秘書の香田です」

相手方に応じ、私も「飛躍製作所の伍嶋美沙です」と挨拶した。

「実は御社に——いえ、美沙さんにお願いがあつてまいりました」

「お願い、ですか？」

思つてもみなかつた言葉に、目を丸くする。

私の仕事に対するクレームじゃないようで安心したけれど、お願いってなんだろう。

下請け工場の一社員である私に、大企業が頼み事をするなんて想像もつかない。

鷹野さんは少し言いつらそうに目を伏せ、しばし間を空けた後、私をまっすぐに見て口を開いた。

「単刀直入に申し上げます。実は美沙さんに、とある会社の機密情報を入力してもらいたいのです」

……え？ 目の前の人は何を言っているんだろう。意味がまったくわからない。

隣を見れば、両親も怪訝な顔で鷹野さんたちを見ていた。

「き、機密情報って、なんですか？ 私にそれを入手してほしいなんて、いったいどういう……」

しどろもどろになりながら疑問を投げかけると、鷹野さんは手を上げて私の言葉を制する。

「順を追って説明します。——あなたは、紗月重工株式会社をご存じですか？」

「は、はい。もちろんです」

戸惑いつつも頷く。紗月重工とは、創業百年を超える歴史ある大企業だ。桂馬重工とは長年ライバル関係にあると言われていて、二社は常に競い合っている。

「紗月重工は、去年、代表取締役が交代しました。それ以来、急激な成長を遂げています。国内だけでなく海外事業も成功し、飛ぶ鳥を落とす勢いで業績を伸ばしています。おそらく、何か改革を行ったのでしょうか」

鷹野さんの言葉に、私は「そうなの？」と隣に座る両親を見た。私は部品作りに熱心な反面、経済情勢にはあまり注目していない。

両親が洪面で頷くのを見て、私は「なるほど」と相槌を打った。

鷹野さんはさらに話を続ける。

「忸怩たる思いですが、私ども桂馬重工の業績は、ここ数年横ばいです。このままでは、

紗月重工に後れを取ってしまう可能性も否めません。そこで美沙さんには、紗月重工に入社してもらい、具体的にどのような改革を行っているのか、調べていただきたいのです。実際に組織に入ってみないと、見えないところがありますからね」

「はあ……」

私の口からは、曖昧な声が漏れた。この人は何を言っているのだろうという戸惑いが強すぎて、話の内容が頭に入っていない。

「あの……」

そこで声を出したのは母だった。怪訝そうな顔で、鷹野さんの様子をうかがいながら尋ねる。

「唐突すぎてまったく理解できていないのですが、つまり、あなた方はうちの美沙にスパイの真似事をさせるつもりなんですか？」

スパイの真似事。その言葉を聞いて、ようやく私も、彼らが私に何を頼んでいるのか理解できた気がした。でも、やっぱりよくわからない。どうして私に頼むの？

私は混乱していた。けれど、落ち着けと自分に言い聞かせて、鷹野さんたちに問いかけた。

「どうして私に、こんな話を持ちかけるんですか？ 選ばれた理由がまったくわかりません。情報を盗むなんて、私にできるとは思えないのですが……」

すると鷹野さんはテーブルの上で指を組み、苦々しげな表情を浮かべる。

「あなたに課報なんて真似ができないのは理解しています。紗月重工のシステムに侵入してデータを盗んだり、重要な書類をコピーしたりするようには必要はありません。あなたに依頼したい仕事は、紗月重工代表取締役のひとり息子、紗月誠と親密な仲になり、彼から話を聞くこと。ただそれだけです」

「……は？」

私と母と父、三人分の声が重なる。

「な、な、な」

ぱくぱく口を開くだけの父は、驚きで目がまん丸になっている。母は顔を真っ赤にして、声を荒らげた。

「正気ですか！ 美沙に紗月誠という社長のご子息をたらしこめと!？」

それに対して、鷹野さんと香田さんは冷静な顔で「落ち着いてください」と言う。しかしこんな状況で落ち着けるわけがない。父は「ふざけている!」と叫び、椅子から立ち上がった。

「俺たちを馬鹿にしているのか!? うちはいつだって、あんたたち大企業に振り回されてきた。無茶な納期で注文をかけたなり、赤字ギリギリまで値切ったりすることだって、ザラにあっただろう。その上、娘まで利用しようとするのか。経営不振はあんたらの責

任だろ、下請けを巻き込むな！　こんな……馬鹿げた話……っ！　世間に暴露してやる！」

「お、お父さん、落ち着いて！」

普段から桂馬重工への鬱憤が溜まっていたのだろう。ついに怒りを爆発させた父の腕を引つ張り、なだめる。

でも、母の嘆きも父の怒りも、鷹野さんたちには響いていないようだ。彼らは冷たい表情で両親を見ている。そして再び鷹野さんが口を開く。

「我々にとつても、苦渋の判断だご理解ください。私たちには後がないんです。これは桂馬重工社長直々のお願いなんです。それに、暴露なんてしたら、この工場がどうなるか……わかるでしょうか？」

「ど、どういうことですか？」

おらずと聞いた私に、鷹野さんが視線を寄越した。

「このままでは紗月重工に鞍替えする取り引き先が増え、桂馬重工の業績が落ちていく。そうなれば、最初に切るのは下請け工場です。飛躍製作所はすでに『切る候補』として挙がっています」

「……どうしてですか」

まさかの取り引き停止宣言に、私の声が震える。

「今の時代、部品製作は人件費が圧倒的に安い外国発注が主流です。飛躍製作所が作る金型や部品の完成度の高さは評価しています。しかし、技術力が高くても生産力は低く、費用がネックになっている。我々としては、飛躍製作所と良好な関係を続けていきたいと考えていても……」

鷹野さんは私から視線を外し、次は父に目を向けた。

「少し完成度が下がっても、低予算で部品を作れるなら、完全に外国発注へシフトしてはどうかと、株主総会でも毎回議論されています。つまりあなたの会社は、よほどのことをしなければ生き残れない。——例えば、こんな課報まがいの依頼を引き受けるほどのことをしなければね」

しん、と部屋が静まり返る。

私も両親も、一言も言葉が出なかった。父が怒りのやり場を失ったかのように、力なく椅子に座る。

桂馬重工でそんな話がされていたなんて……知らなかった。

飛躍製作所が受けている注文は、現在九十パーセントが桂馬重工からのものだ。

桂馬重工からの注文がなくなったら、とてもじゃないが経営が成り立たない。うちの工場は潰れてしまう。

「……少し、考える時間をください」



父が呻くように言う。

「早いうちに連絡をください」と言い残して、鷹野さんたちは帰っていった。リビングには再び静寂が落ちる。母が「はあ」とため息をつく。

「……ああ、お昼、まだだったわね。おそば作るから」

「いいよ。なんか、食欲ないし」

正直、食事をとる気分にはなれない。まさに降って湧いたような話を、私はまだ理解できていないのだ。

この工場の未来も、そして私が抜擢された突拍子のない話も、すべてにおいて現実味を感じない。

母は肩を落としてテーブルにひじをつく。

「これもすべて、桂馬重工に頼りきりだったツケなのかしら」

「いや、こんなおかしな話、普通はありえんだろう。つまり俺たちが思っていたよりも、桂馬重工は追い込まれているってことか」

父が落ち込んだ声を出す。大口の取り引き先が大企業だと、安心して構えていたのが、まずかったのかもしれない。

「だからって、あんな無茶なことを言うなんて……。大体、どうして美沙なの？ 私が言うのもなんだけど、美沙はそうたいした顔でもないし、スタイルだって普通よ。大企

業の御曹司をたらしこめるような魅力はないわ」

「そ、そのとおりだけど……。私の顔、お母さん似なんだからね？」

母の言うとおり、私の顔は平凡そのものだし、スタイルだって際立っていいわけじゃない。それは平凡を絵に描いたような容姿の母の遺伝子を、きっちり継いでいるからだ。

私と母の言い合いを遮るように、父は声を上げる。

「とにかく、この話は断るぞ。さっきは気が動転して、少し考えさせてほしいなんて答えてしまったが、考えるまでもない話だ。こんなばかばかしい——美沙に依頼したのも、俺たちの足下を見ているからだろう。俺たちみたいな候補は他にもいるんじゃないか」

「下請け会社で、私くらい年の娘がいるところを片っ端から回ってること？」

私が尋ねると、父は「きつとそうだ」と頷く。

「御曹司をたらしこんで情報を聞き出せなんて、品がない。桂馬重工にプライドはないのか？ はっきり言って最低の方法だ。そんな会社に尻尾を振って媚びるなんて、俺にはできない。取り引き停止上等だよ！ こっちから切ってやる」

父はフンと鼻を鳴らし、腕を組んだ。

「だけど……それでいいのだろうか。私だって無茶な話だと思う。でも、桂馬重工との取り引きがなくなったら、注文は十分の一以下まで減る。」

そんなことになったら、会社は倒産し、従業員と私たち家族は路頭に迷ってしまうのだ

ろう。

……そんなの、嫌だ。

私はぎゅっと手を握り、声を絞り出す。

「お父さん、私、やってみるよ」

「は!？」

父が素っ頓狂な声を上げた。母も目を丸くしている。

「いや、無理だ。こんなことやってはいけない。大体、美沙は『男をたらしこむ』とはどういうことか、わかっているのか？」

「わかっているよ！　なんかこう……『よっ、日本一！』っておだてて、懐に入り込んでらいいんでしょ」

私の言葉に、父はなぜかとても疲れた顔をした。

「まったく違う。こう……あれだ、身の危険があるかもしれないんだぞ」

「スナイパーみたいに命を狙うわけじゃないんだし、危険はないでしょ」

「そういう危険じゃなく、美沙の体が危険なんだ！」

父が声を荒らげる。体が危険ってどういうことだろう？　私が首を傾げると、次は母

が口を開いた。

「あのね、美沙。たらしこむというのは、はっきり言えば『色仕掛け』をしろというこ

とよ。あの人たちはね、体を使って紗月重工の御曹司を骨抜きにして、情報を引き出すと言っていたの。そんな体を売るようなこと、私たちが許すわけないでしょ？」

母の説明に、ようやく私は理解した。

なるほど、つまりハニートラップを仕掛けろという意味だったのか。映画やドラマで見るハニートラップは、色気たっぷりの女性が魅惑ボディを使って、巧みにターゲットを籠絡していた。

しかし私には悲しいほど色気がない。恋愛経験だってゼロで、語れる恋バナは高校時代の片思いの話くらい。部品と金型を作るしか能のない、しがない機械加工職人の見習いだ。仕事着は可愛げのない作業服だし、お洒落な服も持っていないし、お化粧もしない。物心ついた頃から、私は父の背中を見て育った。夜遅くまで、工場で部品を磨いていた父。慣れた手つきで寸分の狂いもない完璧な金具を作り上げるさま。

私は父に憧れ、この世界に入った。それ以来、歯車やネジ、精緻な金型に執心している。

そんな私が色仕掛けをするなんて、無謀を通り越して笑い話だ。でも、泣きたくなるくらいに深刻な話だった。

できなくてもやらなきゃいけない。私がこの工場を守りたいと思っっているのならば。

「大丈夫だよ、お父さん。私、やれるだけやってみる。正直言って、成功させる自信は

まったくくないけど、少なくとも私がこの話を受けること自体には、意味があると思うから」

「美沙……」

「もし失敗しても、これをネタに桂馬重工と交渉できるでしょ？　こんな無謀なことを手伝ったんだからって言えば、少なくともすべての契約を切られるようなことはないんじゃない？」

父が洪面で黙り込む。とても複雑な心境なのだろう。

経営者として、なんとしてでも工場と従業員を守らなければならぬという気持ち。同時に、娘が心配だという親心。頑固でお喋りが苦手で、ついでに言うとう仕事を教えるのも下手な父だけど、私を思ってくれているのは、ちゃんと伝わってきた。

「私のことは心配しないで。いろいろ頑張ってみるからさ」

私が元気づけるように笑うと、両親はますます不安そうな顔をした。しかし、ふたりともそれ以上は反対しなかった。

どうあがいても、私たちにはふたつしか道が用意されていない。

引き受けるか、断るか。つまり、工場を潰すか潰さないかという瀬戸際の選択。

それなら私は潰さないほうを選ぶし、両親もそうであってほしい。だから私は、ふたりを元気づけるように、にっこりと微笑んだのだった。

その日のうちに父が鷹野さんに連絡すると、彼らはあつという間に、私が紗月重工に入社する手筈を整えた。最初から、私がこの話を引き受けると確信していたかのようだ。会社が存続の危機に陥ったら、やらざるを得ないと踏んでいたのだろう。こちらの足下を見る相手のやり方には憤りを感じるけど、やると言ったからにはやるしかない。

ターゲットである紗月重工社長の息子、紗月誠に近づいたためのお膳立でもしっかりされている。

私は偽りの名を与えられ、契約社員として紗月誠の所属する設計開発部に入社する予定だ。

その名は『北條美沙』。

北條家は紗月重工の大株主であり、その発言力と影響力は社長と並ぶほどだと言われている。

そんな名家が、自ら私に姓を貸すという。そして、北條家と懇意にしている紗月重工社長の弟、紗月専務のはからいによって、私は紗月誠に最も近い部署へ宛てがわれることになったらしい。

北條家も、紗月社長の弟も、言わば紗月重工側の人間だ。

それなのに、どうしてライバル企業の桂馬重工を手助けしているのか……私には、そ

これまでの情報は与えられていない。彼らの事情というものなのだろう。

そんな中、私に出された指令はただひとつ。お膳立てされた立場を有効利用して、紗月誠をたらしこみ、紗月重工で現在行われている改革の内容についての機密情報を聞き出すこと。細かいことは指定されておらず、とにかくわかったことを逐一報告するように言われている。余計なことを詮索すれば破滅へと繋がる、鷹野さんに脅された。

うさんくさい話。不安しかない指示。信用できない大人たち。

とてもじゃないが、成功する気も、楽しく仕事ができる気もしない。とにかく私はできるだけのことをやって、努力したという姿勢を彼等に示すしかないのだ。

そして、すべてが終わったら、私は実家に——古い油の匂いがする工場に帰る。大好きな、物作りの仕事に戻る。今まで通り、ひとつひとつの仕事に丁寧に取り組みながら、夢のために頑張ろう。

信じられないような状況の中、私は心に決めたのだった。

それから数日して、『北條美沙』たる私に、その立場でいる期間中に暮らすマンションの一室が用意された。東京都内のビジネス街にある紗月重工まで一駅という、立地条件のいい場所だ。

紗月重工に入社する前日、私は着替えなどの少しの荷物をスーツケースにまとめて、

その部屋に引越した。

そして一晩明け、入社日当日。今、マンションのリビングで、着慣れないビジネススーツを着て、私はスタンドミラーを見つめる。

雑誌やインターネットサイトを見て覚えたばかりの化粧は、似合っているだろうか。

工場では真つ黒なセミロングの髪をひつつめただけだったけれど、美容院でパーマをかけてライトブラウンに染めた。爪にはサンゴ色のマニキュアを塗り、母に買ってもらったお洒落な腕時計をつけている。

……名家のお嬢様感は出ているだろうか？ よくいる新入社員に見えるんじゃないかと心配だけど、私にできる精一杯のことはやった。

「よし、行こう」

ぐ、とお腹に力を入れて、気合いを込める。朝ご飯はもりもり食べたから、元気だけはある。

マンションを出てすぐの駅から電車に乗り、一駅で降りてビジネス街を歩く。

こんな風に『出勤』するのは生まれて初めてだ。今までは、家で作業服を着て朝ご飯を食べ、徒歩二分の工場で働いていたため、すべてが新鮮に感じる。

秋色に染まる街路樹が並ぶ歩道を歩き、私は潜人先である紗月重工にたどり着いた。

「………わあ」

思わずあんぐりと口を開けて、その建物を見上げる。

紗月重工は、都内ビジネス街に広大な敷地と高層ビルを持っていた。その敷地の入り口のゲートには、警備員がふたり体制で立っている。真っ白な石畳の道をしばらく進むと、ガラス張りのビルが待ち構えていた。

私はおっかなびつくりビルの中に入る。なんて立派なビルだろう。さすがは国内の製菓業で業績トップを誇る紗月重工。ついキョロキョロしながら、私は受付に近づいた。受付の女性を前に、深呼吸をひとつとして、お腹に気合いを込める。

「す、すすす」

声が裏返った上、うまく言葉が出てこなかった。なにせこんなお芝居じみたこと、生まれて初めてやるのだ。私は自分が思っていたよりもずっと緊張しているらしい。

「すみません！ おはようございます！ きよ、今日よりここで働かせていただき、北條美沙と申します！」

昨夜から何度も練習した挨拶を口にする。ガチガチに固まった上、声がやけに大きくなってしまった。周りを歩く社員の人たちが驚いたように私を見る。

やばい、いきなり失敗してしまったかもしれない。今の私は『お嬢様』なんだから、もつとしとやかに、小さな声で言うべきだったかな。

私が心の中で焦っていると、受付の女性は目を丸くしてから「少々お待ちください」

と言い、どこかに電話をはじめた。そして通話を終えると、再び私を見る。

「本日より、設計開発部に配属される契約社員の北條美沙さんですね。ただいま責任者がまいますので、お待ちください」

「は、はい」

次は小声で答えることができた。ちゃんと、お嬢様として見られているかな。

前髪を軽く整えていると、後ろから「おはようございます」と、低く通る美声が聞こえた。振り返ったら——そこには、目を剥くほどの美形男性が立っていた。

今までに見たことがないほどの端正な顔を前に、私はごちんと固まってしまふ。美形が微笑む。彼がかけているオーバル型の眼鏡がきらりと光った。

「設計開発部部长を務めております、紗月誠です。あなたが北條美沙さんですね。今日からよろしくお願います」

私は思わず、目の前に立つ彼を凝視する。

ふんわりと後ろに撫でつけたオールバック、シャープな輪郭に、整った眉目。背は私より頭ひとつ分高く、スラリとした体つきはビジネススーツの魅力を引き立てている。

完璧だ。一ミリの隙間もなくカッチリとはまった金型みたいに、パーフェクトに綺麗な男の人。

彼は不思議そうな表情で、私に声をかけてくる。

「北條さん？　どうかしましたか？」

「ほ、ほうじょう？」

耳慣れない姓を呼ばれ、私は首を傾げた。

「え、北條さんですよ？　今日からうちに配属される予定の」

「あつ、あ——そ、そうです。私が北條美沙です！」

自分が置かれた立場を思い出し、シユタツと片手を上げて挨拶する。紗月さんはほつとしたように微笑み、「職場に案内します」とビルの出入口に向かった。

え、このビルの中に職場があるんじゃないの？　そう思ったけれど、私は黙って彼についていく。すると、高層ビルから少し離れたところにある、こぢんまりした二階建ての白い建物に案内された。

「設計開発部は企業秘密の多い部署なもので、他部署と隔離されているんです。どこから情報が流れるかわかりませんからね」

「そ、そうですよね。企業秘密が漏れたら大変ですものね」

こくこくと頷く。まさに私が、その企業秘密を探ろうとしているスパイなのだが……それにしても、入社して早々そんな重要部署に配属されるなんて、珍しいだろう。さすがは専務のはからいだ。

私は、一歩前を歩く男性をそっと見上げた。

——この人が私のターゲット、紗月誠。紗月社長のひとり息子で、鷹野さんからもらったデータによると三十歳の独身らしい。

こんなに顔がよくて優しそうな人なら、モテるに違いない。恋人はいないのかな？　しかし……私、大丈夫なのだろうか。こんな美形を色仕掛けで陥落させる自信は、まったくくない。

うっふんなんて言った日には、鼻で笑われてしまいそうだ。

桂馬重工もえらい無茶ぶりをしてきたものだ、とげんなりしてしまう。彼らは私の何を見て、ハニートラップを仕掛けられると思ったのだろう。つい、「はあ」とため息をつく。

すると紗月さんが建物の入り口のドアを開けながら、心配そうに振り返った。

「どうしました。疲れましたか？」

「いつ、いいえ！　体力だけはありあまつてるんで、大丈夫……じゃなくて！　も、問題、ないですわ。……オホホ」

口に手を当ててお嬢様っぽく笑ってみると、紗月さんがなぜか私をまじまじと見てから、「そうですか」と言った。

やばいな。こんな調子で、私はやっていけるのか。お嬢様のフリをするのがこんなに難しいとは思わなかった。無意識のうちに、ちよつとした仕草で素の自分が出てしまう。

でも、後戻りすることはできない。家族のため、工場のため、私はずっと、この完璧美形の御曹司を籠絡しなければならぬのだ。

「ご……と気合いの炎を燃え上げさせ、紗月誠の背中を睨みつける。すると、彼がまたクルツと振り返った。私は慌てて笑みを浮かべる。ちよつと顔が引きつったかもしれない。

「まずはメンバーに紹介して、部署内を案内しますね。それから守秘義務についての誓約書を確認していただきます。その後は、さっそく仕事に入ってください」

「わかりました」

「それから北條さん。ひとつ質問してもよろしいでしょうか」

「はい、なんでしょう？」

軽く首を傾げた。今のは、お嬢様らしい仕草だった気がする！

「失礼を承知ですが、あなたは、うちの株主である北條家の関係者なのでしょうか。あなたが契約社員として入社することになった経緯を調べたところ、どうも最近入社した他の社員の情報と紛れてしまったようで、素性調査が曖昧なんですよ」

『北條美沙』がどのようにして紗月重工に入社したのかは、専務によって隠蔽されていると聞いた。彼や北條家が桂馬重工に手を貸したというのは、絶対にバレてはならない秘密なのだ。

私は鷹野さんからもらった指示書の内容どおり、返事をする。

「はい、私は北條家の娘です。父の教育方針で、幼少の頃から海外で生活しています。最近日本に帰ってきたのですが、よいご縁があつてこちらに入社させていただきました」

「ふうん。……よい、ご縁、ね」

紗月さんは私から視線を外し、意味ありげに呟く。「どうかしましたか？」と聞くと、「なんでもありません」と微笑まれた。

「ずっと海外で過ごされていたのですね。北條家とは何度か食事を一緒にしたことがあつたのですが、あなたにお会いした記憶がなかったもので、不思議だったのです」

「そ、そうなんです。びっくりされたでしょう。オホホ」

「ちなみに、どの国で暮らしていたんですか？」

「えっ」

想定外の質問に、体が固まった。どの国……どの国だ？ 指示書には『海外』とだけ書かれていて、国名の指定はなかった。ええと、どうしよう。どこにしたらいいんだろう！

「カ、カーポベルデです！」

「カーポベルデ」

私の答えを繰り返す紗月さん。たたりと冷や汗が流れる。つい、先週テレビの旅番組で観た国の名を口走ってしまった。私がカーボベルデについて知っていることなんて、テレビで数十分流れた情報しかない。

私が心の中で焦っていると、彼は「なるほど」と頷く。

「アフリカ大陸の西側、大西洋に浮かぶ島国ですね。自然が豊かな国だと聞いています」

「そ、そうなんですよ。のんびりしたところで」

「確か公用語はポルトガル語ですが、実際にはその言語がクレオール化したカーボベルデ・クレオール語が広く使われているのですよね。うちは海外事業も展開していますので、カーボベルデと取り引きする機会があれば、是非、北條さんの知識を貸してください」

「は、はい。どんとお任せくださいませ。オホホ」

どうしよう。ポルトガル語もカーボベルデナントカ語もまったくわからない。本当にかの国と取り引きするようなことになったら、私は全力で逃げるしかない。

「では、こちらが設計開発部になります。みなさん、集合してください」

建物に入るなり、紗月さんが声を上げた。その声で、中にいた人たちが集まってくる。

「今日から、うちで働いてもらう北條美沙さんです。自己紹介は各自で適当に済ませてください」

「は、はじめまして。北條美沙です。よろしくお願ひいたします」

挨拶をしてから周りを見る。設計開発部の人数は紗月さんを合わせて十人らしい。大企業のわりに少ないような気がする。機密情報の多い部署だから、少数精鋭って感じなのか。

「部長。北條さんって、あの北條さんですかあ？」

妙にだらりとした声が飛んできた。声が出たほうを見ると、明るい茶髪で吊り目の男性が、ポケットに手をつっこんで立っている。

「そう、あの北條さんです。彼女は幼少から海外で暮らしていたようで、最近日本に戻られたそうですよ」

「ふうん、北條さんにはもうひとり、娘がいたのね。初耳だわ」

紗月さんの説明にボソッと呟いたのは、部署内で唯一の女性。彼女は私を興味深そうにまじまじと見てくる。私は居心地の悪さに俯いた。

「もうひとり、娘がいた」ということは、北條家には本物の令嬢がいるのだろう。そんな話、資料にはまったく書いていなかった。驚くと共に、本物について尋ねられたらどうしようと思身が竦む。



「そんなわけですから、みなさん、くれぐれも『大人の対応』でよろしくお願いしますね」

ニッコリと紗月さんが微笑み、全員が「はい」と間延びした返事をした。

……なんだか、独特というか、大企業という感じのしない雰囲気だ。

「さて、北條さん。この建物の中を案内しますね。それから守秘義務の誓約書を書いていただき、仕事内容についても少し詳しく話をします」

「わかりました」

私が返事をする、紗月さんはさっそく歩き出した。部署のメンバーはそれぞれの仕事に戻っていく。

……どうやら、設計開発部は北條家と所縁ありそうだ。紗月さんの物言いも何かを含んだような感じがしたし、過去に何かあったのかもかもしれない。

「この建物は、一階に設計室と仮眠室、休憩室があり、二階に実験室、会議室があります。北條さんの仕事は、主に一階で事務仕事をしていただくことです」

「はい」

説明しながら歩く紗月さんの後ろに続いて、二階への階段を上る。内装は白を基調としていて、清潔感があった。しかも、一階の半分くらいが吹き抜けの天井になっていて、天窓から日が差し込んでいる。

私が天窓をジッと見ていたからか、紗月さんも同じように天井を見た。

「この設計開発部は去年に改装しましたね。吹き抜けの天井と天窓は、私の提案で取り入れてもらいました」

私は「なるほど」と頷く。

「これなら、日中は自然光が照明代わりになりますし、電気代が浮きそうですね。節電効果は出たのでしょうか？」

そう聞くと、なぜか紗月さんは私をジッと見た。な、なんだろう、変なことを言ったかな。

けれど、彼はすぐにニッコリと微笑む。

「はい、目に見えて効果がありましたよ。また、吹き抜けの天井は開放感もあるので、リラクセスしやすいという利点がありましたね」

「根を詰めて仕事しても、いい結果が出ないこともありますからね」

「ふふ、そうですね。でも、逆に閉塞感のある部屋でじっくり仕事したいという意見もあって、うちは個室も用意しているんですよ」

「気分に合わせて仕事ができるのはいいですね。自分を追い込みたいという気持ちもわかります」

さすが大企業だ。社員目線で職場を作っている。社員がよりよい仕事ができるように、

いろいろと工夫されているらしい。私が感心して頷うなずいていると、紗月さんはクスクスと笑い出した。

「わかるんですか？ 自分を追い込んで仕事をしたい気持ちか？」

「え？」

笑われた理由がわからない。きよとんとした私に、彼は首を横に振る。

「いえ、なんでもありません。さて北條さん、こちらが二階の実験室です。企業秘密が多いもので、今は少しお見せする程度ですが」

白いドアを開けて、部屋を見せてくれる。入り口の内側に、付着した塵ちりや埃ほこりを除去するエアシャワーが設置されていた。その奥にはガラス張りの実験室があり、最先端の工作機械が並んでいる。

すごい、さすが大企業だ。もっと近くで見たい。私が身を乗り出すと、紗月さんは再びクツクツと笑い出した。さっきから、私の言動について笑われてる気がするんだけど、どうして？

私が不安になって彼を見上げると、「すみません」と謝られた。

「随分と機械がお好きですね。北條家の方は、機械に興味がないのだと思っ

ました」

北條家の人間が機械に興味があったら、変なのだろうか。なんだか妙に意味深に言わ

れ、私は慌わづててしまう。

「えっ。……あっ、あー……そ、その、海外育ちなものですか！ ドミニカ共和国で！」

「さっきカーボベルデっておっしゃっていませんでしたか？」

間違いなく、話すたびにボロが出ている。

「あっ、えっと、て、転々てんてんとしていました、その」

私がしどろもどろになりながら取り繕つくろうと、紗月さんはドアを閉めて「ドミニカ共和国に住んでいたら、スペイン語も堪能とくなんなんですわ」と言った。

どうしよう、またドツポにはまった気がする。もちろんスペイン語なんてできない。

——施設の中を見たあとは、会議室で守秘義務についての説明を受け、誓約書にサインをした。かいつまんで言えば、この部署で見聞みもんしたことを外に漏もらせば、相応の処罰を受けるという内容だ。

私はサインをして『北條美沙』の社員証を手渡されながら、少しだけホッとした。私がスパイであることに違いはないけれど、言い渡された指令は、あくまで紗月さんをたらしこんで情報を聞き出すこと。この部署内でドロボウみたいなマネをする必要はないと思うと、肩の力が抜けた気がする。

しかし、私はどうすれば紗月さんを口説くせき落とせるのだろうか。

苦悩しながら紗月さんの後ろを歩いていると、彼は一階に戻り、デスクが並ぶスペースに移動した。

「さっそくですが、今日は北條さんのスキルを確かめさせてください。なにせ、あなたに関する資料がまったくないものですから、何をお任せしたらいいのかわからないんですよ」

「はー？ よくそんな契約社員をうちの部署に配属したね。いくらうちが人手不足だって言っても、人事部は何を考えているの？」

横から声が飛んできた。見れば、先ほど挨拶した時も話しかけてきた、茶髪の男性だった。

「こら、手島。相手は北條家のご令嬢よ。さつき紗月部長から注意されたばかりでしょ」彼をたしなめたのは、部署唯一の女性社員。手島と呼ばれた男性は「すみませんねえ」と心にもなさそうな謝罪をし、パソコンに顔を向ける。

「申し訳ありません、うちの部署はちよつと独特な社員が揃っていました。気分を悪くしていませんか？」

心配そうに尋ねてくる紗月さんに、私は慌てて手を横に振った。

「いいえ！ こちらこそ、いろいろ気を使わせてしまってますみません。あの、私に何ができるかわかりませんが、できる限りのお手伝いをさせていただきます」

そう言うと、なぜだか部署内がざわめいた。メンバー全員が目を丸くして私を見ている。

な、なぜ、そんな反応をするんだ。変なことはいないよね!?  
すると、紗月さんは優しく微笑んだ。そして私の背中を押し、空いた席に座るよう促してくれる。ここが私のデスクらしい。

「北條家の方からそんな言葉を言ってもらえたのは、初めてですよ。嬉しいです」

紗月さんの言葉に妙な引っ掛かりを感じる。彼はさつきも『北條家の方』に何か思うところがあるような言い方をしていた。

けれどその意味を考える間もなく、彼は話を変えた。

「さて、時間もないので、はじめましょう。設計図面の模写はやったことがありますか？」

「はい」

「……え、やったことがあるんですか？ やり方を教えなくてもできますか？」

念を押すように紗月さんが尋ねる。彼は動揺しているみたいだけど、なぜかわからない。おかしいことを言っていないよねと考えつつ、私は頷いた。

「で、できますけど、だめなんですか？」

声が震える。北條家の令嬢は、図面を引けてはいけないのだろうか……

その時、茶髪の男性——手島さんが、ぶはつと噴き出した。

「こら、手島！」

「ごめん、刈谷。でも、限界で」

手島さんが女性社員——刈谷さんに謝る。

私はうかがうように紗月さんを見上げた。図面が引けることで、私が北條家の令嬢でないとはれたのだろうか。初日で失敗するなんて、目も当てられない。

紗月さんは嬉しそうに微笑むだけで、特に私を疑うような言葉は言わなかった。

「すみません。少し驚いてしまいました。即戦力になってもらえそうで、とてもありがたいです。では、スキルを測りますので、模写をしてください。出来上がったら、こちらの女性社員の刈谷に見せてくださいね」

「わかりました」

私の席の斜め前に座る刈谷さんに頭を下げると、彼女は「よろしくね」と笑顔を向けてくれた。

私はパソコンを立ち上げ、さっそく作業をはじめた。

そして黙々と模写を進めつつ、考えこんでしまった。紗月さんと同じ部署に配属されたのはいいが、ここからどうやってアプローチをしたらいいのか、さっぱりわからない。とりあえずお昼に誘ってみるとか？ それとも数日は様子見に徹するべき？ そんなこ

とを頭の片隅で考えながら、マウスを動かして図面を引き続ける。

しばらく作業をして、図面の模写が終わった。

「ふうー」

長い息を吐き、凝りをほぐすように肩を揉む。ちよつと難しい図面だったけど、普段は見えない形のもだったから面白かった。知らない部品の構造を見るのは楽しいな。

「よし。刈谷さ……あれ、二時!？」

顔を上げると、壁にかけられた時計は二時を指していた。図面を引きはじめたのは、朝の九時半くらいだったから——四時間以上図面を引いていたの？

あたりを見ると、私ひとり立ち上がっていて、設計開発部のみんなに注目されていた。恥ずかしくなって「すみません……」と小さく謝り、椅子に座る。

すると、斜め前からクスクスと忍び笑いが聞こえた。刈谷さんだ。

「ごめんね、北條さん。お昼に誘ったけど、返事がなかったからそのままにしちゃったの。すごい集中力で、感心しちゃった」

「私の悪いくせなんです。集中すると周りの音が全然聞こえなくなってしまう……。せつかく誘ってくださったのに、すみません」

つい図面と考え事に夢中になっていた。私が謝ると、刈谷さんは「いいのよ」とニッコリ笑ってくれる。

「それだけ集中して取り組んでたのよね。謝らなくていいわ。これからは肩を叩いて誘うわね」

彼女の言葉に私はホッとした。そして出来上がった図面をプリントアウトして、刈谷さんに見せる。彼女はパソコン用の眼鏡をはずすと、「どれどれ」と見てくれた。

「へえ、うまいものね。文句なしの出来よ。明日から、図面の清書をお願いするわね」  
「はい、わかりました」

「あと、ミーティングの議事録の作成とか、雑用をいくつか頼もうと思ってるの。でも、その日にできる範囲でいいからね。基本的にウチは残業禁止よ」

「そうなんですか？」

刈谷さんは「ええ」と頷く。

「社長の方針なの。残業しなくてはいけないほど仕事があるのなら、残業をしなくて済むシステムを構築するよう、それぞれのチームで検討せよってね」

「なるほど。人手が足りなければ、私のように臨時で雇い入れたりするんですね」

「そういうこと。それじゃあ、少し遅くなったけど、北條さんはお昼ご飯にしたらどう？」

「はい。では、お言葉に甘えますね。お弁当を持ってきていますして、食事をしてもいいスペースがありますか？」

バッグからお弁当箱を取り出すと、刈谷さんはマジマジとそれを見た。

「北條さん。それ、自分で作ったの？」

「はい」

そこで、手島さんがなぜか「クック……」と堪えきれないという様子で笑い声を上げた。彼は私の行動をよく笑う。きつと彼は、私のお嬢様らしくないところを笑っているんだらう。

つまり、彼が笑う時は、私が令嬢として間違えているということだ。そう考えると、私の振る舞いについて今後の参考になる気がした。今夜は反省会をして、しつかり改善と対策を考えよう。

「その休憩室で食べるというわ。自販機はフリードリンクで、社員証をかざせば自由に飲めるわよ。あと、ビルのほうには五階に食堂があって、二階にはカフェもあるからね」

刈谷さんが丁寧に教えてくれる。私は礼を言っただけでしつこく休憩室に移動し、遅いお昼休みを取るのだった。

お昼休みの後、刈谷さんが指示してくれた細々とした仕事をやっていると、あつという間に終業時刻になった。

「お疲れ様。終業時刻になったら、残った仕事は次の日に回してね。スケジュール的にどうしても厳しいものがある場合は、その都度相談して。今日お願いしたものは急ぎじゃないから、続きは明日進めてね。今日はもう帰って大丈夫よ」

刈谷さんの言葉に頷いて、私は帰り支度をはじめめる。周りを見れば、みんなも片付けをしていた。

本当に残業のない会社なのだと驚く。工場では毎日のように残業をして、納期と格闘していたというのに。やっぱり大企業は余裕があるというか、悠々とした雰囲気があつて羨ましい。

そんなことを考えながらバッグを肩にかけたところで、「北條さん」と声をかけられた。声が出たほうを向くと、そこには紗月さんが立っている。

「もしお時間がありましたら、夕食をご一緒してくれませんか?」

「……え?」

ぼかん、と紗月さんを見上げた。帰るところだった他の社員も、興味深そうにこちらを見ている。

紗月さんは、ほれほれするほど爽やかな笑みを浮かべて言葉が続けた。

「後日、設計開発部のみんなまで正式な歓迎会を開こうと思っただけですが、今日のところは私に付き合ってもらえませんか? 上司として親睦を深めておきたいんです」

紗月さんのお誘いに、私は密かに感動した。お金持ちで、社長である親の仕事を継ぐような立場の人は、傲慢な人が多いのだろうと、思い込んでいたからだ。

けれど彼は大企業の社長の息子であるにもかかわらず、驕ったところがまったくない。それに、言葉遣いが丁寧で態度も柔らかく、とても部下思いな人だ。人柄のよさが全体からにじみ出ている。

私はこんなにいい人を騙して、たらしこんで、情報を聞き出そうとしているのか。

そう気がつくと、自分という存在がとても汚く思えて、嫌悪感でいっぱいになる。こんなことはしたくない。そんな思いが心をよぎったけど、奥歯を噛んで踏みとどまる。

私がかここにいるのは、両親と工場のため。私はみんなを守りたくて、この話を引き受けたのだ。

それなら、後戻りしてはいけない。紗月さんの誘いを、チャンスだと思わなければ。「わかりました。ご一緒させてください」

そう返事をする、紗月さんは嬉しそうに目を細めて「じゃあ、さっそく行きましょう」と私を促した。彼は車通勤だと言うので、設計開発部の建物を出て、駐車場まで一緒に歩く。

……なんだろう。妙に視線を感じるのだけ……

思わずあたりを見回すと、ビルから出てきた社員のほとんどが私たちを見ていた。中

には私を睨みつける女性もいる。

「やはり、目立ってしまいますね」

紗月さんは苦笑まじりにそう言った。少し困ったような表情だ。

「部長はいつも、社内で見目されているんですか？」

「そうですね。ですが、今日は北條さんのほうが見られていると思いますよ。なにせあなたは、紗月重工において社長の次に影響力があるとと言われる北條家のご令嬢ですからね」

「あ……、そ、そう、ですよね」

私は俯き、どきまぎしながら相槌を打つ。忘れていたわけじゃないけど、私はこの会社において、紗月さんと同じくらい目立つ肩書きだと偽っているんだ。

「みんなが噂していますよ。あなたが私の婚約者で、社会見学のために入社したのではないかと」

「こ、婚約者って。それに、社会見学で入社って……ちよっと失礼な話ですね」

「ふふ。それなら、あなたはどんな気持ちでこの会社に入ったのでしょうか？」

駐車場まであと少し。たくさんの視線を浴びているのに、紗月さんは悠々とした雰囲気聞いてくる。彼にとつては、こんな視線は日常のことなんだろう。

一方の私はどうしても慣れない。居心地悪く感じつつ、どう質問に答えようか考えた。

私の本当の目的は、紗月さんにハニートラップを仕掛けること。でもそんなことは言えるはずがない。

それなら、社会人としてはどうだろう。私は今の部署に入って、何を感じたか——

「私がこの会社に入ったのは、お給料という対価に見合う仕事をするためです。会社をひとつの完成品と考えるなら、私はその一部を支えるネジのようなものでしょう。それならネジとして、目の前にある仕事を果たしたい。だから、社会見学のつもりはありません」

紗月さんがびたりと立ち止まった。私も足を止め、不思議に思っで見上げると、彼は口元を押さえて俯き、肩を震わせている。……これは、笑いを堪えているのかな。

「な、なんですか。私、変なことを言いましたか？」

今日は他人によく笑われる日だ。思わず眉をひそめると、彼は何かをごまかすように手を振り、再び歩きはじめた。私は慌ててその後を追う。

「い、いいえ。まったく変ではありません。むしろ素晴らしい。あなたは素敵な人だと思っ、笑ってしまったんですよ」

なんだそれは。まったく意味がわからない。どうして素敵だと思っ、笑うのか……ん、素敵？

待って、素敵ってどういうことだろう。それって、私を好意的に見ているという

こと？

「あ、その、部長」

「はい？ あ、着きましたよ。この車です。乗ってください」

紗月さんの真意を聞き出そうとしたところで、彼は車の助手席のドアを開けて促してくる。

私がおとなしく車に乗り込むと、紗月さんは運転席に乗り込み、車を出した。

上司が部下とふたりきりで食事をするというのは、よくあることなんだろうか。こうやって車に乗って出かけるのも、一般的なことなのかな。高校を卒業してすぐに実家の工場に就職した私は、他の職場を知らない。妙に落ち着かないし、ドキドキしてしまう。

車は国内メーカーの有名な高級車で、シートの座り心地が非常によく、エンジン音や振動もほとんどない。おまけに、品のいい香りがして、お洒落な気分になってきた。

すごいなあ、御曹司はこんな車に乗れるんだ。

「今から行く店は、北條家がよく使う店に比べたら大衆的かもしれませんが、味は保証しますよ。ところで、そんなにキョロキョロして、何か珍しいものでもありましたか？」

「いいえ！ えつと、す、素敵な車だあって思っただけです」

「ありがとうございます。あなたのお父上の愛車に比べれば地味な車ですが、シンプルな内装が気に入っています。それに、この車には紗月重工が開発したエンジンが搭載されてるんですよ」

「そうなのですか？ すみません、勉強不足で……」

私が紗月さんを見ると、彼は横目で視線を寄越し、静かに微笑む。

「謝らなくていいですよ。車種を見ただけで、そこまでのことは普通わかりませんしね。ちなみにすべてうちで開発したわけではなく、海外のメーカーと共同で研究したものです。従来のものより、排出ガスのクリーン化に成功したエンジンです」

「へえー！ すごいですね。きっと様々な試行錯誤があったんですね」

ついうつとりしてしまふ。この車に搭載されたエンジンには、見たこともない技術や、アイデアが詰まっているんだろうな……

「北條さんは、こういう機械の話が好きなんですか？」

「……はい。好きですね。エンジン……バラしてみたいなあ……」

頭の中で夢のようなエンジンを想像しながら、ぼんやりと答える。すると紗月さんがくすりと小さく笑う。私はハッと我に返った。

「う、嘘です！」

「え、嘘なんですか？」

「はい。エンジンをバラしたいなんて、少しも思っていないせん！ わ、私が好きなのは、お洒落な洋服とスイーツです！」



昨日雑誌を見て必死に考えた『北條美沙』の設定を口にする。そう、私はお嬢様なんだ。北條家の令嬢はエンジンをバラしたいなんて思わないだろう。……たぶん。

女性向けの雑誌をいくつか読んでいたら、ほとんどがお洒落な洋服の紹介と、季節のコーディネートで埋め尽くされていた。また、人気のスイーツが特集された雑誌もあったので、おそらく年頃の女性は、お洒落な洋服とコーディネート、スイーツに傾倒しているのだ。それならきつと北條家のお嬢様も好きはず。

私が必死になって言い募ると、紗月さんはクツクツと肩を震わせた。

「そうですか。今から行くお店は、流行りのスイーツもあると思うので、よかつたらどうぞ」

「は、はい。是非！」

膝に乗せた手をギュッと握って答える。お嬢様のフリは、難しすぎる。本当に私は、紗月さんを騙せているのだろうか……

紗月さんが連れて行ってくれたのは、ビジネス街のはずれにある、落ち着いた雰囲気のカフェバーだった。中に入ると、私たちのような仕事帰りの社会人が、楽しげにお酒を飲んだり食事をしたりしている。

こんなにお洒落なお店には初めて来た。私はきよるきよると店内を見回す。すると、

紗月さんは振り返って声をひそめた。

「本当は、もっと格式の高いレストランを探していたのですが、今日はなかなか予約が取れなくて。大衆的なお店しか選べず、すみません。気を悪くしていませんか？」

「ええっ!? そんなことありません! すごくお洒落ですし、素敵なお店ですよ。どんなお料理が出てくるのか、とても楽しみです!」

……って、待てよ。私は北條家のお嬢様なんだから、もっと高級なお店に行き慣れた感を出さないと駄目だよね。

「ふお、ふおあぐら、とか、あるんですか?」

「え?」

「たっ、食べ慣れてますけど! フォアグラとか、キャビアとか、トリュフとかが使われているお料理があると、面白いです、わね!」

思いつく限りの高級食材の名を口にする。紗月さんはクルリと前を向いて私に背を向け、ゲホツとひとつ咳をした。……紗月さん、風邪をひいているのかな。彼はすぐにまた振り返ると、「そうですね」と微笑んだ。

「多分あると思いますよ。前にここに来た時、メニューで見ましたから」  
「そ、そうですか。なら、ここは五つ星ですね。ご、合格です」

私の言葉に、また紗月さんは前を向いて咳をした。やっぱり風邪だろうか。よく効く

のど飴をすすめるべきかな。  
 そう考えているうちに、私たちは個室に案内される。白いソファが向かい合わせに置かれていて、その真ん中には丸い木製テーブルがあった。部屋は防音なのか、外のざわめきはまったく聞こえない。

私たちはテーブルをはさんで向かい合わせに座り、紗月さんがメニューを渡してくれた。私がそれを眺めていると、お店のスタッフが小さなワイングラスを「食前酒です」と言ってテーブルに置く。

「私は運転があるので飲めませんが、遠慮なくどうぞ」  
 そうすすめる紗月さんに、私は驚いて尋ねる。

「え、い、いいんですか？ 上司が飲めないのに、部下がお酒を飲むなんて」

「ささやかですが、北條さんの歓迎会ですからね。私は次の機会にゆっくり飲ませてもらいますよ」

ニッコリと優しく微笑まれ、私はおずおずとグラスを手にとった。精緻なガラス彫刻が施されたグラスは、ダウライトに反射してきらきらと輝いている。

……すごいなあ。なんだか、世界がまったく違うから、怖くなってしまふ。

「いただきます」

頭を軽く下げてから、お酒を飲んだ。するりと喉を通る白ワインは、とろけるように

甘い。

「おいしい！」

「お口に合ってよかった。今スタッフを呼びましたので、注文しましょうね」

慌てて再びメニューを見る。令嬢らしいものを自然に注文しないと。でも、令嬢って、どんな料理を好むんだろう？

悶々と考えていると、スタッフが来てしまった。あわあわと慌て、とにかく高いものを頼もうと、目に入ったメニューをビシッと指す。

「で、では、こ、これ、ください」

「はい、トリュフスフレオムレツですね」

トリュフスフレオムレツ。なんだろう……よくわからないけど、トリュフっていうくらいなのだから、高級な感じがする。令嬢としてはまずまずの品だろう。

紗月さんはブルスケッタの盛り合わせと、サイコロステーキを注文した。そして、私に声をかけてくれる。

「お酒、おかわりはいかがですか？ 他にもいろいろありますよ」

「あまり強くないんですけど、この食前酒みたいに甘くて飲みやすいものはありますか？」

「では、ドイツワインなんてどうでしょう。甘いワインが多いですよ。銘柄はどうしま